

## 丸山富雄の「運動教育論」再考

山梨 雅枝

Masae Yamanashi: The Reconsideration of "Movement Education" theory of Tomio Maruyama: Bulletin of Sendai University, 48 (2) : 91-98, March, 2017.

**Abstract:** This criticism aims at introduction and expansive succession of the Movement Educational theory by Tomio Maruyama.

Tomio Maruyama, the professor who retires from Sendai University this year, published the paper about Movement Education in 1985 and published the book about Movement Education in 1990.

Movement Education is a physical exertion theory which based on children and influenced by the kinematic theory of Rudolf Laban.

As a common point of the Movement Educational theory in 1985 and 1990 by Maruyama, the instructing method and the contents of study are mentioned.

Moreover, the aspects of these two writings that the natural environment and social environment which surrounding the problem of "pleasure" and children's entertainment are mentioned.

After introducing the above, the following four points were mentioned about the subject for expansive succession of the Movement Educational theory of Maruyama.

- ① Comparison of physical education theory and movement education theory of Japan
- ② Copyright examination of by Laban
- ③ The problem of Nostalgia in childhood
- ④ The secret problems of children

**Key words:** Tomio Maruyama, Movement Education, Child

キーワード: 丸山富雄, 運動教育, 子ども

### I. はじめに

本学教授の丸山富雄<sup>注1)</sup> (以下, 丸山と略す) は, 1985年に運動教育 (Movement Education) に関する論文<sup>6)</sup> を発表し, 1990年に運動教育に関する著書<sup>13)</sup> を出版している. なお丸山によれば, 運動教育とは Rudolf Laban<sup>注2)</sup> (以下, ラバンと略す) の運動理論に影響を受け, 主に幼児や小学生に適応された身体運動理論であるという<sup>7) 14)</sup>.

この点で本学では, 対外的な事業の一環として丸山の運動教育理論に基づく運動指導を宮城

県伊具郡丸森町のたんぽぽこども園で実践<sup>注3)</sup> している. また, 来年度より本学に子ども運動教育学科が設置されることから, 日本の運動教育研究の第一人者である丸山の運動教育理論を, このタイミングで読み直すことは重要であると考えている.

そこで本稿では, 丸山の運動教育理論について, 上述した論文と著書をもとに, 両文献の共通点とそれぞれの特徴を析出したうえで, 丸山の運動教育論の発展的継承の可能性について述べたい.

## II. 2つの運動教育理論にみられる共通点

### 1. 運動教育の指導法

丸山によれば、運動教育とは、従来の形式的「活動—中心」(activity-centered)の体育を批判し、子どもが自らの身体や運動の諸要素を自覚するという「子ども—中心」(child-centered)の創造的・知的な個別化された幼児や児童への教育であるという。これは、従来の軍隊式指導(cohort instruction)でみられるような、学習者に設定されたスキルを獲得するための全体指導及び運動技能による選別に対する反省から、1960年代後半にアメリカで子ども中心の内容と方法によって再構成された教育である<sup>註4)</sup>。

こうした背景をもつ運動教育を、丸山は「子どもが自らの身体や運動の諸要素を自覚しながら運動緒技能を高め、それらを日常の活動の中に活かすために創造的に指向された子ども中心の教育」と定義する<sup>7) 14)</sup>。

丸山の運動教育の実践においては、スポーツやダンスの技術、また日常動作の基本となる動きの獲得を目指し、できるだけ多様な動きを体験することが望ましいとされる<sup>11) 16)</sup>。そして、こうした多様な動きを体験可能にするための指導方法について、子どもの動きや選択、発見に対する自由への尊重を前提として、「動きの探求」(movement exploration)や「問題解決」(problem solving)、「発見の導入」(guided discovery)が挙げられる<sup>8) 15)</sup>。

また、丸山の運動教育では、指導者は子どもが練習すべき活動や技能の範囲をある程度主導的に決定するものの、最終的には子どもたちが自ら複数の回答を導きだし、それを実践する活動であると言える。このように、丸山の運動教育理論から、その指導において子ども中心主義的態度をみることができるだろう。

### 2. 運動教育の学習内容

次に運動教育の学習内容をみれば、その中心となるのは基本的な運動技能の学習やゲーム、リズムカルな運動、創造的・表現的な運動とされる。さらに基本的な運動技能の学習は、「移動」「平衡」「操作」の運動類型と、「身体」「質」「関

係」の運動分析カテゴリーを組み合わせで行われるとする<sup>11) 17)</sup>。

この点で丸山は、運動類型の理解を運動発達学者であるDavid L.Gallahue(以下、ガラフューと略す)の理論を引き継ぎつつ、学習されるべき「基礎的運動スキル」(basic movement skills)について、大きく3つのスキルに分類された14種類の具体的な動きを示した(表1参照)。

表1 【ガラフューの基礎的運動スキル】

スキル	内容	具体的な動き
移動スキル	移動の運動	転がる, 2足・4足で動く
非移動スキル	その場での運動 や平衡型の運動	(身体の軸を中心に)曲げる, 伸ばす, ねじる, 振る, バランス
操作スキル	物を扱う運動	運ぶ, 振る, 押す, 引く, 打つ, 投げる, 捕る

(丸山,1985,p.6を基に作成)

また丸山は、Glenn Kirchner<sup>1)</sup>(以下、キルヒナーと略す)の「運動分析」<sup>2)</sup>を「基本的な運動スキル」として紹介している<sup>11) 17)</sup>(表2参照)。

この表からもわかるように、キルヒナーはRELATIONSHIP<sup>註5)</sup>の構成の内容として器具との関係を挙げている。この見解を受けて丸山は、運動教育のなかで運動用具や器具の導入は必須であるとし、その理由として、第1に用具や器具は多様な感覚と活動を生み出すこと、第2に複雑な技能の発達に必要な、手と目、足と目の協応性を発達させることを挙げている。

加えて丸山は、用具の安全性や子どもの技能レベルを考慮して、ヤーンボール(毛糸玉)やビーンバッグ(長方形のお手玉状のもの)、くつ下ボール(片方のくつ下に、もう片方のくつ下を詰めたもの)、新聞紙ボール(新聞紙を丸めたもの)、フープ(ガスや水道のホースを繋いだもの)などを挙げ、身近な材料で作成可能な用具を提案している<sup>8) 18)</sup>。

このように丸山は、子どもでも用具の作成の

表2 【キルヒナーの運動分析】

構成要素	内容	認知（自覚）	運動の要素
WAT	身体が行いうるもの	身体	1. 曲げる, 伸ばす, ねじる, 回転 2. 体重の移動 3. バランス 4. 跳ぶ
WHER	身体が動く部位	空間	1. 個人的 / 限定された空間 2. 一般空間 3. 方向 4. 高さ 5. 進路
HOW	身体が動く方向	運動の質	1. 時間 / 運動のスピード 2. エフォート / 運動の強さ 3. 自由な / 制限された流れ
RELATIONSHIP	他の人々や器具との関係	関係	1. 器具との関係 2. 類似の運動 3. 対比の運動 4. 同時 / 順次の運動

(丸山,1985,pp.6-7 を基に作成)

段階から関わることができ、かつ遊びの延長で運動が行われるような展開を提示しており、運動教育の実践において用具との関わりを重視している。

### Ⅲ. 2つの運動教育理論にみられる各々の特徴

#### 1. 1985年の運動教育論

1985年の論文<sup>6)</sup>では、運動教育の理論と基本的な概念について言及したうえで、その適用方法が検討されており、また運動教育をめぐる問題とその適応についても論じられている。以下、同論文の特徴を描出したい。

まず丸山は、プレイ体育論者の Daryl Siedentop（以下、シーデントップと略す）による運動教育に対する批判をまとめている。それは端的に述べれば、運動教育は「身体や運動による教育」の単なる言い換えでしかなく、何ら新しい思想を示すものではないという、教育目標に対する批判である。この点について丸山は、体育が教育制度内にある限り、「身体や運動による教育」のような全人教育として掲げられる目標は世界的な傾向であると述べ、運動教育に限らず体育として実践される場合には、あらゆる運動や活動が「身体や運動による教育」

として捉えることが可能だと指摘している<sup>9)</sup>。

また、シーデントップは運動教育について、運動の理解や知的な側面を強調するあまり、運動の「楽しさ」や本来の運動学習が軽視されているという、内容に対する批判を挙げている。この見解を受けて丸山は、小学校高学年以上の子どもの多くは特定のスポーツやダンスに興味に移り、運動の「楽しさ」もそれらの活動のもつ「競争」や「表現」に直接結びつくと述べ、このような段階では「動きの探究」はほとんど既知のものであり、好奇心を引き起こすことが難しくなるとしながらも、さまざまな「動きの探究」は、それが陳腐な既知のものでないならば、根源的な「楽しさ」を生み出すと述べている<sup>9)</sup>。

加えて、丸山は Johan Huizinga（以下、ホイジンガと略す）や Roger Caillois（以下、カイヨワと略す）のプレイ論に依拠し、運動の「楽しさ」をゲームやスポーツといった「競争」とダンスの「表現」に限定するのは、一面的な捉え方であるとし、スポーツが常に全ての者にとって「楽しさ」を得られる対象ではないと指摘する。続けて丸山は、スポーツは明らかに技術的な層化とそれに伴う関心の分化を引き起こし、それ故にシーデントップの期待する「楽しさ」も奪われかねないと述べている<sup>9)</sup>。

また、丸山は、子どもを取り巻く社会的・物理的環境の変化から十分な初期学習を経験できない現状への1つの解決策として、「計画的な教育組織」による運動教育の活用を提案している<sup>10)</sup>。これについて丸山は、1990年の著書<sup>13)</sup>で詳述しているため、次節で確認したい。

## 2. 1990年の運動教育論

丸山による著書<sup>13)</sup>の冒頭では、日本の高度経済成長期をはさんだ前後の子どもの遊びをとりまく自然環境、社会環境の変化について以下のように述べている。

丸山によれば、高度経済成長期以前の子どもの遊びは、川遊びや木登りといった自然や四季との関わりの深い外遊びを中心とするものであり、子どもたちは、空き地や裏庭などに秘密の遊び場をもっていたという。また、どの子もいわゆる「みそっかす」と呼ばれる弟や妹を連れて、小学校高学年のガキ大将を中心とする子ども集団で遊ぶのを常としていた。子どもは、この縦の繋がりで構成された集団の中で自然とルールを学び、社会性を身につけると共に遊びや遊具の作り方といった文化も継承していたという<sup>19)</sup>。

しかし、1990年現在では、自然の遊び場は殆どなく、外遊びは人工の公園で実施せざるを得なくなったが、そこでは禁止事項が多く設定されているため、子どもにとって魅力的な場所だとは言いがたく、公園までの心理的距離が遠くなっているという。さらに、子どもの遊び集団は、子どもの数の減少や集合住宅などの閉鎖的な家庭環境によって消失してしまった。そして、子どもの遊びは、かつてのような集団での外遊びから、テレビやゲームといった室内で行われる、個の遊びへ変化したと述べている<sup>20)</sup>。

そのため現在では、自然や季節と一体となった素朴な運動遊びの実践の場が、保育園や幼稚園、学校、スポーツクラブなどに期待されるようになった。しかし、これらの施設は、大人によって管理されている世界であり、ここでは、子ども自身の工夫や創造性が担保されず、子ども本来の姿を歪める結果になりかねないと丸山は指摘している<sup>21)</sup>。

これについて丸山は、野球の実践を例にあげ、かつての草野球である遊びと今日の少年野球であるスポーツとでは、同じ年代の子どもが行う野球ではあるが、内容も考え方も変化したと述べている。

丸山によれば、草野球は、練習や基本運動は殆どなく、ゲームが中心に展開されており、そこでは子どもが考え出した様々なハンディキャップやルールの変更が採用され、参加した子ども全員が同等に野球を楽しめるための配慮や工夫がみられるという。しかし、少年野球では、大人の監視の下、予め設定された環境の中で技術習得に重点が置かれているため、形式主義、管理主義、技術主義、勝利主義であり、試合に参加できるのは技術的に優れている子どものみであり、技術が劣る子どもは試合に参加することができず、応援に徹するしかないと指摘している<sup>21)</sup>。

また少年野球にみられるような大人が中心の環境では、遊びの要素が一切ないために、子どもは決められたルールに従いながら設定されたメニューをひたすらにこなすだけであり、子ども自身による工夫や創造性を発揮する機会を得ることは難しいと言える。

このように、野球という1つの運動をとってみても、実施する展開方法や目的の違いによって、子どもが運動に取り組む姿勢に大きな差がみられる。これについて丸山は、草野球は、その日に集まった全員を取り込む「共存型」であるとし、少年野球は技術的に劣る子を淘汰するような「排斥型」とであると述べている<sup>22)</sup>。

## IV. 丸山の運動教育理論の発展的継承の可能性

以上の分析を踏まえて、丸山の運動教育理論の発展的な継承のために必要であると考えられる点について、4つの観点から述べたい。

第1に、丸山が運動教育論を展開したのは、当時の体育が総じて単元学習に傾斜しがちであるという、一種の閉塞状態を打破する意図があったためである<sup>註6)</sup>。この点で、1985年の論文<sup>6)</sup>の中でプレイ論について述べているこ

とからも、プレイ論を理論的根拠として、1977年に改訂された学習指導要領にみられる「楽しい体育」を当然おさえていたと考えられる。しかし、丸山の運動教育理論では、ホイジンガやカイヨワ、シーデントップの理論から運動の「楽しさ」について展開する一方で、日本で実践された「楽しい体育」論に関する具体的な内容や方法については必ずしも詳らかでは無い。従って、今後は、日本の体育教育理論と運動教育理論を比較検討することで、日本独自の運動教育が確立され、教育現場で広く実践される可能性があると考えられる。

第2に、丸山は運動教育の可能性について、スポーツを含めた広範な領域で実践可能であるとしつつも、実際には多くの場合、ダンスの領域に限定されていることを認めている<sup>9)</sup>。それは、運動教育の実質的な創始者であるラバンが舞踊家であり、従ってその理論もやはりダンスを基軸に構成されるからに他ならない。とはいえ運動教育の系譜を鑑みれば、そのモチーフは確かにラバンを祖としつつも、その後の発展を担ったのは、先述したキルヒナーや、あるいは丸山が依拠する Valerie Preston, F.L.G.<sup>3)</sup> といった、ラバンの弟子や継承者である<sup>注7)</sup>。この点を敷衍すれば、いま一度ラバンに立ち戻って運動教育の意味と役割を再検討することも有意義だろう。なぜならラバンの理論の裡には、単純な意味でのダンサーの育成、あるいは青少年向けの身体教育といった、限定的な目的に基づく運動理論とは別に、たとえば労働における身体の有用性といった問題をも含まれているからである<sup>27)</sup>。

第3に、丸山は1990年の著書<sup>13)</sup>で、高度経済成長期以前に多くみられた子どもの遊び集団について述べているが、たとえば丸山がガキ大将を中心とする子ども集団による遊びの経験を肯定的に評価するにあたり、十分な論拠が示されているとは必ずしも言い難い。この点については、幼少期の丸山自身の個人的な経験が反映されている可能性も想定されるが、ともあれ教育学者の矢野智司に依拠するならば<sup>23)</sup>、こうした丸山の肯定的評価の背景には、故郷で過ごした「古き良き時代」、とりわけ子ども期への懐

かしさという時間的意味が見え隠れする。その意味において、子ども期への懐かしさは、しばしばもはや現状では実現され得ない生活が過去に投影されたノスタルジーの対象となりえるのであり<sup>24)</sup>、従って丸山が肯定的に捉えた、かつての集団のありかたもまた、ともすれば懐古主義へと至り兼ねない点には注意する必要があるだろう。言い換えれば、どうすれば懐古主義に陥らずにかつての子ども集団の遊びの経験の意味を検討することができるか、が今後問われなければならない。

第4に、丸山は1990年の著書<sup>13)</sup>では、秘密の遊び場をもつ子どものみで構成された集団から、大人によって監視される集団へと子どもの空間が変化したと論じられている。つまり、大人が介入することのなかった子どもの遊びは、大人によって周到に用意された「擬似的空間」<sup>25)</sup>での遊びへと変化したのである。このように、子どもは、常に大人によって監視され、秘密を持つことが許されなくなった<sup>注8)</sup>。この点で、再度矢野を援用すれば、子どもが秘密をもつということは、日常の世界とは異なった世界、何重にも重なりあった多様な現実に住むことを学ぶことであり、秘密にされるべき新しい世界の発見は、新しい自分の発見でもあるという。また、秘密は傷つきやすい子どもの自己を庇護し、大人のまなざしから身を引かせ真の自己に沈潜し立ち戻ることを可能にすると述べている。そして、秘密を告げ共有することによって他者と親密性を獲得することになると指摘している<sup>26)</sup>。翻って丸山は著書の中で、子どもの秘密の重要性の詳細については述べていない。しかし、子どもが秘密をもつことの意味を深く検討することで、丸山の運動教育理論を発展させる手掛かりになるのではないだろうか。

## V. おわりに

本稿は、丸山の運動教育に関する2本の著作から丸山の運動教育理論について改めて読み直し、再検討を図ることを目的とした。

II章では、丸山の2本の運動教育論に共通する点として、運動教育の指導法と学習の内容に

ついて挙げた。まず、運動教育の指導法については、子ども中心主義的態度が求められており、子どもの主体的な運動の実践を目指し、多様な運動を経験させることを重視していた。そして、運動教育で習得された運動技能は、日常の活動の中で活かされるためのものであった。次に、学習の内容としては、基本的な運動技能の学習や創造的で表現的な運動の実践であり、運動用具や器具の導入が必須であるとしていた。

Ⅲ章では、1985年の論文と1990年の著書の特徴をそれぞれ取り上げた。論文では、運動教育をめぐる問題として、プレイ論に依拠する「楽しさ」についてふれた。そこで丸山は、子どもにとっての「動きの探究」が陳腐な既知のものでないならば、根源的な「楽しさ」が生み出されると論じている。また、論文の特徴としては、日本の高度経済成長期前後の子どもの遊び集団の変化についての問題が析出された。丸山は、運動実践の在り方として、かつての子どもの遊び集団は、そこにいる全員が参加できる「共存型」として高く評価していた。一方で丸山は、大人によって管理された運動実践の環境では、高い技術や勝利が重視されるために、技術の高い子どものみが参加できる「排斥型」だとしている。

Ⅳ章では、前章までを通じた丸山の運動教育論を踏まえて、①日本の体育教育理論と運動教育理論、②ラバンの身体運動理論、③懐古主義とかつての子ども集団、④子どもの秘密の意味、の4つの角度から課題を提起した。これらの課題への即自的回答を筆者は未だ持ち合わせていないが、丸山の運動教育論の発展的継承を図るうえで、それぞれの検討作業は必須となろう。従って今後もこれらの課題を追究していきたい。

### 【注記】

注1) 丸山富雄(仙台大学体育学部教授)1949年東京都葛飾区生まれ。都立日比谷高校卒業後、東京教育大学体育学部、同大学院修士課程修了。学問領域の専門は体育社会学。専門種目はラグビー。学生時代より幼児の運動指導に係わり、

野外でのキャンプや運動指導の経験も豊富である。また、運動教育に関する著書『幼児・児童の運動教育—理論と実際—』(1990, 不昧堂出版)では、第1部の理論編(pp.10-59)を担当した。この著書は、日本においてラバンの影響を受けた運動教育を理論的展開した貴重な理論書であるといえよう。

注2) ラバン(本名:R.L.de Varalja)は、1879年12月5日オーストリー=ハンガリア帝国のプレスブルグ(現在のブラチスラバ)で生まれ、1958年1月1日ロンドンで死去した、ダンサー、振付家、バレエ・マスター、舞踊理論家である。ラバンは、ドイツでモダン・ダンス(modern dance:クラシック・バレエのアカデミックな流れに基づかない劇場舞踊のこと。「オックスフォードバレエダンス事典」2010,p.545)活動をしていたが、ヒットラーの弾圧・迫害から逃れて1938年にイギリスに亡命し、1946年にマンチェスターでArt of Movement Studioを設立した。同所は、後にTrinity Laban Conservatoire of Music and Dance(通称、ラバンセンター)となった。また、2005年には、Trinity College of Musicと合併し、学校教育に導入され始めたモダン・ダンスに関心を抱いた現職教員が集まる拠点となり、ラバンはイギリス舞踊教育の中心人物となっていった。ラバンは、人間の身体動作の力学と表現の法則分析を通じて「キネトグラフィ・ラバン Kinetographie Laban」という新しい舞踊記譜法を開発し、これはのちに「ラバノーテーション Labanotation」として体系化された(ルドルフ・ラバン、日下四郎訳「ルドルフ・ラバン—新しい舞踊が生まれるまで。」大修館書店2007,pp.293-295)。さらにラバンは、人間の身体の動きの法則を見出すために様々な芸術と科学をほぼ独学で学び、10冊の書籍の他に未刊行を含む数多くの論文やノートを残した。しかし、現在は絶版などの理由により入手困難なものが多い。ラバンが扱っている内容は舞踊学の構想、舞踊譜、近代舞踊の定義、運動理論、エフォート論など、多岐に渡る。これらは、ダンス関係者や弟子たちにインスピレーションを与え、身体表現を豊かにすることを期待するという性格のものである。そして、彼の理論は弟子たちに受け継がれ、体系化されていった(岡田もえ子「身体表現のスタイル—ラバンの動きの分析と文体論の融合の可能性の示唆—」専修人文論集、2014, 94:pp.151-512)。

注3) 丸森たんぽぽこども園は、2013年4月に開園した認定こども園（保育所と幼稚園の機能が一体化した施設）で、保育所を基本にしたこども園としては、県内初となる。また定員は140名（内、保育所として利用する0～5歳児は110名であり、幼稚園のように昼食後に帰宅する短時間利用の3～5歳児は30名）である。園児の運動時間は、1日1時間程度であり、園庭や室内のホールを中心に実施される主たる運動は、鬼ごっこ、かけっこ、縄跳び、サッカー、ドッジボールであり、その運動目的は、体力づくり、体幹の強化、協調性を養う、決まりを守る、情緒の安定を図るなどである。「丸森こども園運動指導」事業は、2013年より、毎年5月から翌3月までの11ヶ月間にわたって、隔週で実施されているが、運動クラブの他にも英語、造形、音楽の各クラブがあり、その全てのクラブが専門の外部講師によって月に2回、各1時間実施されている。各クラブは4・5歳の園児約20名によって構成されており、クラブの選択は、クラブ体験会で全てのクラブを体験した後に、園児自身及び保護者の意思によって決定される（2013, 11.9に実施した、森たんぽぽこども園園長松本和子氏へのアンケート調査に基づく）。

注4) 和田らは、Daryl Siedentopの著書（“Physical Education Introductory Analysis 2nd.” 1976）を要約するかたちで、運動教育の歴史的経緯を説明している。それによれば、運動教育は、1930年頃にイギリスのラバンによって運動の創造的・美的側面を強調することが示され、その後の急速な理論の発展によって、教授法や運動能力の発展を促す内容まで含みもち、運動の意味経験や科学的な理論として存在するようになったという（和田博史、近藤智靖「Siedentopのプレイ体育論の特徴と課題」日本体育大学スポーツ研究科学 2013, Vol.2, p.52）。その後、1960年代後半にアメリカで従来の体育に対する批判が打ち出され、それに代わる理論としてHuman Movementや運動教育がそれに代わりうるものとして発展した。この理論は、単なる一時的な流行ではなく、人間の運動に関する科学と教育として台頭したが、Human Movementはその後、体育との関係において確固たる位置を占めるには至らなかった。その中で、主に幼児や児童に限定された運動教育は、実践現場に浸透していった（丸山1985, p.2）。

注5) 丸山は、RELATIONSHIPの表記に関して訳語

をつけていない。

注6) 丸山は、単元学習の運動スキル中心の指導法では、運動嫌いを生みかねないとしており、子どもの自発性や創造性を無視した方法であると指摘している（丸山1985, pp.2-3 / 1990, p.17）。

注7) 言語学者の岡田もえ子が「ラバンの理論は複雑であることに加え、彼の考えは常に変化し発展を遂げてきたために、ラバンと共に仕事をしてきた実践者や協力者らによる著書は、むしろ彼の概念を整理して分かりやすく提示しているという利点がある」（岡田もえ子「身体表現のスタイル—ラバンの動きの分析と文体論の融合の可能性の示唆—」専修人文論集, 2014, 94: p.152）と述べ、またキルヒナーをはじめとする多くの研究者がこの分野の祖としてラバンを挙げていることから、ラバンの理論は一般的にこうした回路を経て導入されることが多いと考えられる。

注8) 矢野は、教育学における子どもの秘密の否定は、近代教育学の性格を捉えるうえでも重要な問題をはらんでいるという（矢野1995, p.36）。

## 【引用・参考文献】

- 1) Glenn Kirchner, Jean Cunningham, Eileen Warrell (1970) Introduction to Movement Education. Company publishers: U.S.A., pp.9-16
- 2) Rudolf Laban (1950) The mastery of movement. Dance books: UK,
- 3) V. プレストン, 松本千代栄訳 (1981) モダンダンスのシステム. 大修館書店: 東京
- 4) 片岡康子 (1991) 舞踊学講義. 大修館書店: 東京, pp.116-118
- 5) 桐生敬子, 猪狩初代 (1983) ルドルフ・ラバンのムーブメントエデュケーション—幼児の創造的運動教育を考える為に—その1. 聖徳大学研究紀要, 16: p.88
- 6) 丸山富雄 (1985) 「運動教育」とその適用に関する研究. 東北体育学研究, 8-1 別刷り
- 7) 前掲書 p.3
- 8) 前掲書 p.8
- 9) 前掲書 p.9
- 10) 前掲書 pp.9-10
- 11) 前掲書 pp.6-7
- 12) 前掲書 pp.55-58
- 13) 丸山富雄, 梶原敏雄 (1990) 幼児・児童の運動教

山梨 雅枝

- 育一理論と実際一. 不昧堂出版：東京, pp.5-59
- 14) 前掲書 p.38
- 15) 前掲書 p.54
- 16) 前掲書 p.25
- 17) 前掲書 pp.47-48
- 18) 前掲書 pp.55-58
- 19) 前掲書 pp.10-11
- 20) 前掲書 pp.11-13
- 21) 前掲書 pp.12-14
- 22) 前掲書 p.14
- 23) 矢野智司 (1995) 子どもという思想. 玉川大学出版部：東京
- 24) 前掲書 pp.20-21
- 25) 前掲書 p.43
- 26) 前掲書 pp.34-35
- 27) ルドルフ・ラバン, 神沢和夫訳 (1985) 身体運動の習得. 白水社：東京, pp.114-115.

(2016年11月30日受付)  
(2017年2月15日受理)